

平成30年度 広野町

いいな広野 わが町発見

シネリテラシー
ふるさと創造・映像教育プロジェクト

報告書



ひろの映像教育実行委員会



もくじ

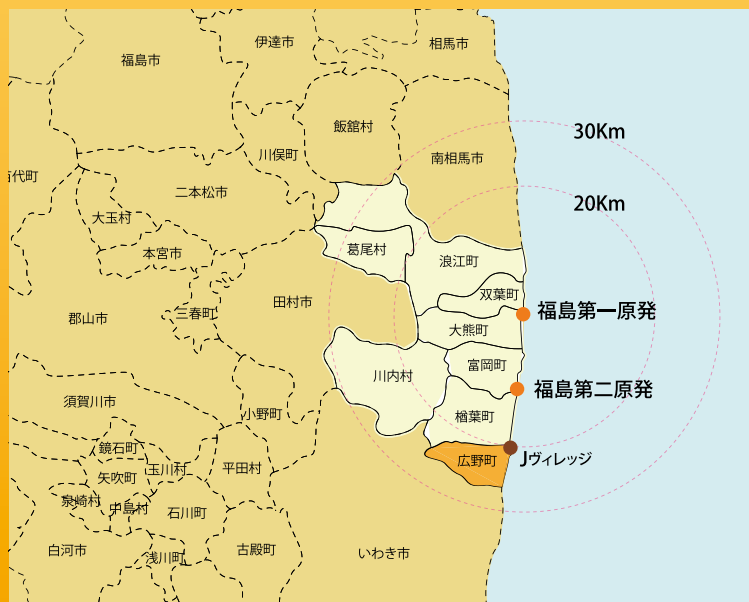
1.	広野町と映像教育	・・・P4
2.	シネリテラシー	・・・P5
3.	アクティブラーニングとしてのシネリテラシー	・・・P6
4.	ひろのモデルへの期待	・・・P7
5.	平成30年度 いいな広野わが町発見 —ふるさと創造・映像教育プロジェクト—	・・・P8
6.	プロジェクトメンバー	・・・P10
7.	プロジェクトの進行	・・・P11
8.	作品紹介	・・・P16
9.	プロジェクトへのご協力	・・・P17
10.	学生スタッフ感想	・・・P18
11.	プロジェクト総括	・・・P21
12.	【参考】各地での発表（2018年・2019年）	・・・P24

はじめに ― 広野町と映像教育 ―

福島県双葉郡広野町立広野中学校では、平成 27 年度から総合的な学習の時間を活用して、地域取材し映画制作を行う教育手法「シネリテラシー (CINELITERACY)」の取り組みを続けている。

広野中学校がこの教育手法を採用した背景には、平成 23 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の事故によって、故郷からの避難を余儀なくされた双葉郡の実情があった。慣れ親しんだ土地から離れざるを得なかった双葉郡の各自治体では、故郷への正しい理解をどのように次世代に促すことができるかが教育課題の一つとなっていた。

その課題解決への一助として、双葉郡内の各小中学校では「ふるさと創造学」を創設し、総合的な学習の時間などを活用し、地域に着目した学びの推進が始まった。広野中学校では、ふるさと創造学のアプローチとして、子どもたちが映像制作を通じて学習の目標に到達することを試み、平成 27 年度から中学校 1 学年が映画制作に取り組んでいる。



福島県双葉郡と広野町の位置

シネリテラシー <CINELITERACY>

広野中学校が採用した教育手法「シネリテラシー」とは、映画制作を用いた主体的な学びの手法である。シネリテラシーは、オーストラリアにおいて公教育として導入され、国語教育の一環として行われてきた。映画制作を用いる主な理由は以下の三点である。

- 1) 映画は多様な役割によって制作される
- 2) 制作の仕組みを理解することでメディア・リテラシーを向上できる
- 3) 制作の過程を通じて多様な存在を認め合う

これらの理由の背景には、多文化多民族国家であるオーストラリアが抱える教育の課題があった。それは、移民を多く受け入れる中で、国語（英語）力をどのように習得することができるか、また文化や宗教など異なる背景への理解を促し、多様性を向上させる教育が求められたからである。このような社会課題の解決の一助として、シネマ（映画）を用いたリテラシー（識字）教育であるシネリテラシーがオーストラリアで展開されてきたのである。



アクティブラーニングとしてのシネリテラシー

近年、日本においては、主体的な学びの総称「アクティブラーニング」が注目を受け、文部科学省は新学習指導要領においても「主体的・対話的な深い学び」の実践を促している。他方で、アクティブラーニングという言葉が国内で市民権を得る前から、ユネスコを中心とした国際社会では主体的な学びが教育の主流とされ、実践が行われてきた。

オーストラリアにおけるシネリテラシーもまたアクティブラーニングの教育手法である。子どもたちは、テーマ設定から議論を開始し、テーマを掘り下げる過程で「考える機会」を多く経験する。また、取材をするにあたり、質問に向けた準備や、取材対象者の選定など、「多様な視点」を想像しながらプロジェクトを進める必要を経験する。さらには、最終的に「どのようなメッセージ（何を伝えたいか）をメディアを介して誰に届けるか？」について自身の考えを主張しながらグループで一つの成果物を完成させる「合意形成」の重要性を経験する。

こういったプロセスが単なる表現学習の枠に留まらず、社会の中でどのようにコミュニケーションをはかり、どのように他者とプロジェクトを進めるかという重要な能力を育むアクティブラーニングの実現を可能にする要素となっている。



中学校学習指導要領 総合的な学習の時間編 平成 20 年 9 月（文部科学省）、
中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編 平成 20 年 9 月（文部科学省）より抜粋

ひろのモデルへの期待

映画制作を通じた学びの手法はこれまで国内各地でも行われてきた実例があるが、災害被災地における地域理解とソフト面からの復興を目的とした映像制作教育は広野町の取り組みが先進的なモデルである。初年度となった平成 27 年の取り組みを総括する中で、災害被災地における実践の要素の中に、他地域での汎用の可能性が示唆された。それは、地域の担い手として必要不可欠な「地域理解」の学びと、復興に向かう災害被災地における「心の復興」の二点であった。

地域理解は、その学びの有無によって地域への愛着や当事者意識に相関があると考えられる。人口減少社会において、限られた人口をどのように地域の中で維持するかが課題になっている地域も多いが、地域理解を促し地域の担い手としての当事者意識を育むことが地域にとって重要となる。

心の復興は、災害被災地におけるハード面の復興と同時並行して取り組まなければならないソフト面の復興とされている。復興の担い手は、地域住民であり、その担い手の心のケアやモチベーションの維持は復興において大切な要素となる。他方で、この要素は災害被災地のみに限ったものではなく、変わりゆく地域の中でどのようにマインドチェンジを行いながら未来を描くことへの意欲を促すかは、国内の各地域、特に高齢化率が高い限界集落や過疎地域における教育課題の一つでもある。

また、広野町における複数年度にわたるプロジェクトから、上記 2 点に加え「地域のアーカイブ」としての機能も重要な要素であることが明らかになった。変わりゆく地域の景観や文化を、そこに住まう当事者が記録をしていくことは、地域における主体的なアーカイブ活動となっている。こうした視点も、他地域への汎用性として大きな要素であると認知している。



としま映像教育プロジェクト（東京都豊島区）

ひろの映像教育実行委員会では、地域理解と地域運営へ主体的に関わることを促す要素を含んだ映像制作教育の取り組みを「ひろのモデル」とし、ひろのモデルが地域課題の解決の一助になり得る地域への推進を行っていくこととしている。

平成 28 年度には東京都豊島区が採用し次年度で 4 年目を迎える。また、次年度平成 31 年度には東京都台東区が多文化共生施策として採用し、都市部における地域理解への一助になりつつある。県内においては、平成 29 年度から飯館村が、今年度からは富岡町がひろのモデルを参考に取組みを進めている。



三春校アーカイブプロジェクト（福島県富岡町・三春町）

平成 30 年度 いいな広野わが町発見 —ふるさと創造・映像教育プロジェクト—

今年度で 4 年目を迎えた広野中学における映像教育プロジェクトは、これまで複数年度での取組みで蓄積してきた経験の上に、新しい取組みに多く挑戦を行った。今年度は、初年度のプロジェクトに携わった教員のサポートがあり、プロジェクトへの理解を行う時間の短縮や、年度ごとに個性も環境も変わる生徒の状況を踏まえた学びの設定などを外部講師を含め熟議する機会に恵まれた。

そうした中で、今年度においては具体的なテーマ設定を学びの最初の段階では設定をせず、「ふるさと」という言葉から発想することについての対話から学びを開始することになった。これは、日本全国で多く聞かれる「ふるさと論」同様に、震災と原発事故以降に双葉郡においても多々使われる「ふるさと」という言葉を、中学 1 年生の等身大としてしっかりと考える機会の必要性について検討を行った結果からである。

「ふるさととは何なのか？」という、哲学的な問いは、ふるさと創造学の中で今後しっかりと学ぶ要素になることであると熟議を重ね、今年度の中学 1 年生においては、抽象的な概念からプロジェクトを開始することになった。この方針は、プロジェクト全体の取組みにハードルを上げることになったが、広野中でのさらなるステップアップに不可

欠なチャレンジでもあった。

1 学期では、生徒たちがそれぞれのふるさとへのイメージを語り、また家族などへの質問を繰り返し、人や世代、経験によって異なる考え方があることに触れた。2 学期においては、1 学期での学びをさらに表現としてまとめるために、外部講師や学生スタッフが協働し取材活動を行った。

人口減少が進む日本において、地域をどのように捉えるのかという問いを、生徒、教員、外部講師、学生スタッフで熟議をした挑戦は、ふるさと創造学がこれから発展していくためにとても重要な要素であると認識した取組みであった。



プロジェクトメンバー

全 体 統 括	千葉 偉才也	(一般社団法人リテラシー・ラボ)
制 作 統 括	島田 隆一	(JyaJya Film)
講 師	伊賀 俊徳	(RESTA FILMS)
	田中 圭	(だいふくフィルム)
	前田 大和	(だいふくフィルム)
	山内 大堂	(ダイドウシネマパッケージ)
試 写 会 講 評	デイビッド・バックingham	(英国ラフバラ大学名誉教授)
制 作 ス タ ッ プ	久保田 彩乃	(一般社団法人ヴォイス・オブ・フクシマ)
	千葉 くらら	(一般社団法人コミュニティ・ワークス)
メイキング制作	配島 徹也	(株式会社記録活映社)
記 録	富岡 宏泰	(味と湯の宿ニューとみよし)
翻 訳 ・ 通 訳	ケニング ジュリア 美星	(テンブル大学)
学 生 ス タ ッ プ	有坂 剛	(東北芸術工科大学)
	飯塚 朋美	(福島大学)
	上木 康太朗	(東京農工大学)
	越智 菜々子	(学習院大学)
	國谷 真代	(中央大学)
	佐藤 和幸	(宮城教育大学)
	信夫 朋香	(宮城県美田園高等学校)
	中川 颯人	(中央大学)

プロジェクトの進行

1 学期

ふるさと創造学としての総合学習をはじめるにあたり、探究学習の最終的な表現方法として映画を制作することは提示しつつ、映画にとらわれない探究を意識して学びを開始した。今年度においては、地域理解を具体的なテーマを設定して進める前段階として、「ふるさと」という言葉について生徒同士話し合い、その内容について周辺の他者（家族や教員、その他住民）への質問を繰り返した。そうした議論の中では、人によって「ふるさと」の捉え方が異なること、またそれでも良いことを学ぶことになった。以下は、生徒自身の発言や、家族などへの質問から出てきた発言の一部である。

「僕にとってのふるさととは、3 か所ある。避難先での思い出も大切で、その後に住んだ場所、そして戻ってきた広野、すべてふるさと。ふるさととは一つじゃなくてもいい」

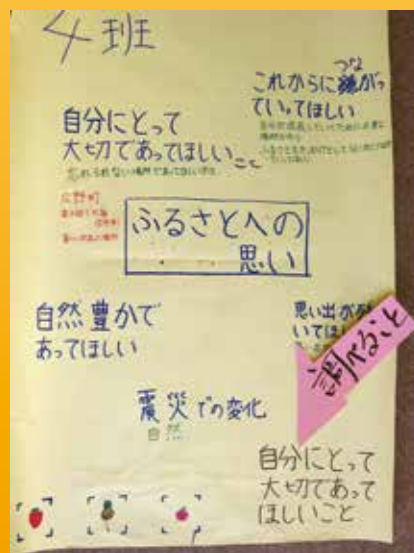
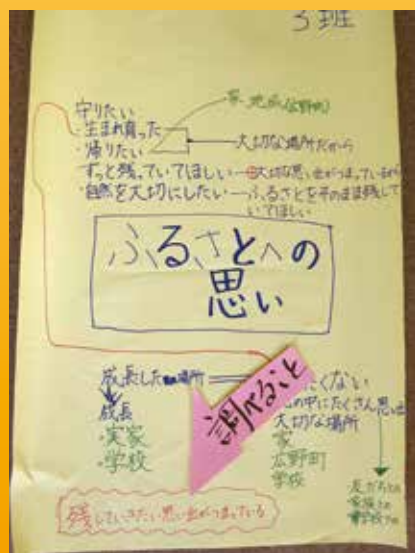
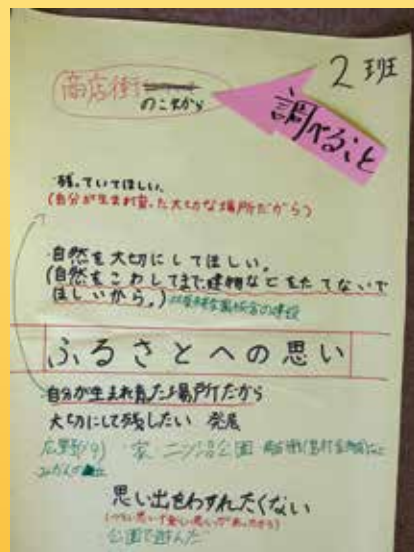
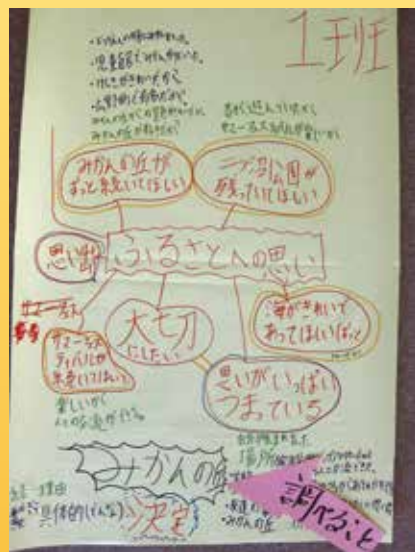
「おばあちゃんにふるさとについて聞いたら、『長く住んだところがふるさと』と答えてくれたけど、12 年しか生きてないから『長く住んだからふるさと』という感覚が理解できない」

「お母さんに聞いたら、『落ち着く場所がふるさと』だと言っていた」「帰りたいと思う場所、帰ってこれる場所」「生まれ育った場所」「自然がいっぱい」「思い出がいっぱい」「心が落ち着く」

このように個人での探究では、多様なふるさとに関する考え方や捉え方が出た。学習は、次の段階として、グループに分けて探究を行うことに移り、徐々にグループ内で映像制作として何を具体的なテーマとして、何をメッセージとして伝えるのかという議論を開始した。

グループ別に探究を開始すると、個人での発想と異なる変化も生まれた。それまで多様なふるさと観に気付いて発言をする生徒の中で、グループ内の他の生徒に合わせて当たり障りのないふるさと像を描こうとする動きも見られた。そうした段階で、班別に外部講師が入り、映画制作に向けて、それぞれの想いを具現化する段階に移り、徐々にグループでの探究を進めていった。

一学期は、抽象的な「ふるさと」に対する多様な考え方や捉え方を知り、その上で身近な生活の中からふるさとをどのように表していくのかについて個人からグループに段階を追って検討を試みた。



プロジェクトの進行

2 学期

一学期の学習を経て、各グループは取材対象者を絞り、取材に向けてのインタビュー内容などの準備を行った。二日間の総合学習の集中日を活用し、学外への取材・撮影活動を試み、その活動を外部講師が指導を行い、学生スタッフがサポートを行った。

ふるさとについての街頭でのインタビューを行う班や、ふるさとを探究する中で度々耳にする町民共通の思い出の施設を探究する班、おじいちゃんとの思い出として刻まれている広野町の豊かな自然を探究する班、震災前まで活気のあった商店街について探究する班など、それぞれの視点でふるさとを探究し、未来を描くことを試みた。

取材・撮影を終えて、学びを振り返りつつ、どのようなメッセージを最終的に作品として表現をしていくかについて議論をし、その意向を基に外部講師が編集を行った。編集後の作品に、生徒たちがナレーションを録音し、それぞれのメッセージを載せて作品は完成をした。

完成作品は、生徒や教員、外部講師、町長、町役場職員の他に、メディア・リテラシー教育の世界的権威であるデイビッド・バックingham英国ラフバラ大学名誉教授も交えて試写会と振り返りの対話を行った。世代や国境、文化などの背景を越えてそれぞれが持っているふるさとについての想いを共有し、多様な考え方や異なる文化背景などの理解など、様々な意見交換を行った。

完成作品試写会を経て、文化祭やふるさと創造学サミットなどでの発表・発信の段階へと移った。



取組みの様子



作品紹介

愛しの AIAI



震災前、広野町の人にとって「アイアイ」は、誰もが知っている親しみあるショッピングセンターでした。その「アイアイ」は、今はありません。「アイアイ」の取材を通して、ふるさとについて考えました。

思い出商店街～みんなで語ってみっぺ～



商店街の思い出を話していただく企画を立て、取材活動をしました。どのようなインタビューをすれば良いか迷いましたが、何とか一つのドキュメンタリー映画として完成することができました。

ふわふわふるさと



「ふるさと」は、人により様々な考えがあります。その「ふるさと」について、街頭による突撃インタビューを決行し、多くの方々の考えを聞かせていただきました。突然の取材に快く応じてくれたので、人の温かみを感じました。

広野の自然—それぞれのふるさと—



広野町の自然とふるさとの関連を考えました。ふるさとには「安心できる」や「大切な場所」などのキーワードがありました。これらと自然は深く関わっているのかを取材しました。

プロジェクトへのご協力

技術協力

DJI JAPAN 株式会社（東京都品川区）

2017 年度に引き続き、世界シェアトップのドローンメーカーである DJI JAPAN 株式会社にご協力をいただき、高精度スタビライザー付き小型カメラ OSMO をご提供いただいた。生徒たちが歩きながら取材をする際などに使用し、生徒たちの目線から広がる臨場感ある映像を切り取ることが可能となった。作品「広野の自然—それぞれのふるさと—」では、生徒が OSMO を片手に山の中を歩き、自然と向き合うシーンが描かれている。



DJI 社スタビライザー（OSMO）



スタビライザー撮影風景



ドローン実演風景

機材協力

社会福祉法人 美芳会（静岡県富士市）

静岡県富士市を中心に高齢者福祉施設を運営している社会福祉法人美芳会は OSMO で撮影が必要になるスマートフォンをご提供いただいた。

協力

法政大学キャリアデザイン学部坂本旬研究室（東京都千代田区）

本プロジェクト立ち上げからご助言いただいている法政大学坂本旬研究室からは、プロジェクト期間中に大学生による取材をいただいた。また、メディア・リテラシー教育の世界的権威であるデイビット・バックingham教授（英国ラフバラ大学）の招聘など多大なご協力をいただいた。

後援

オーストラリア大使館（東京都港区）

オーストラリアにおける多様性理解の教育手法であったシネリテラシーを広野中学校が採用している経緯から、駐日オーストラリア大使館に応援をいただいている。広野中学校の取組みが起点となっている県内外に広がる様々な実践へのご協力もいただいている。



学生スタッフ感想

越智 菜々子（学習院大学）

私は、広野町の商店街を題材にした班のスタッフとして参加しました。中学生にとって、普段、家族や先生以外の大人と関わる機会はほとんどないと思います。そんな中、今回のプロジェクトで生徒たちは、うまく自分の意見を発信出来なかったり、講師の方の質問にどう答えていいかわからなかったりと、苦戦する様子も見られました。今後、社会に出ていく上で、大学生スタッフや、撮影に関わる講師の方、地域の方など、初対面の多くの“大人”とコミュニケーションをとる機会はとても価値があったと思います。今回のプロジェクトは映像制作を通じたものでしたが、日常生活以外の大人と関わる機会というのは、どこの地域においても大切だと改めて感じました。短い間でしたが本当に濃い時間を過ごすことができました。ありがとうございました！

中川 颯人（中央大学）

生徒さんからの気持ちを受け取り、涙ぐむ地域の方々を見て私もうるっとしてしまったことを強く覚えています。これを機に地域に対する関心、価値感が深まりました。自分が住んでいる町も知らずにいるのは悲しいです。これ以外にも感じたことは多くありますが、未熟な私にとってこの経験は大切なものになりました。ありがとうございました。



有坂 剛（東北芸術工科大学）

僕たちのチームは商店街がテーマで、商店街の過去と人について触れました。取材していく中で、津波や原発の影響が今でも残るこの地に、昔から広野という場所に住み続け見守って来た町の人に、一つのドラマを見せられ、とても惹きつけられました。

町で便利に買い物ができるようたくさんの人が協力して商店街に建てられたショッピングモール「アイアイ」。町の人に寄り添ったショッピングモールは震災の影響もあり閉店してしまったのだけれども、約40年続いた歩みの中で町の人にたくさんの思い出や宝物を残していきました。

アイアイで高校生時代バイトをしていたという飲食店を営む女性の方が、アイアイでお店側として働いていた時の町の人との関わりやお客さんとしてお店を利用していた時の思い出を語ってくれ、お話しの最後に彼女の目に涙が。

そこにはただの思い出だけでなく、アイアイが持つお客さんを「アイ」し、従業員を「アイ」する姿勢を今でも心に留め、飲食店をしている中でもその姿勢を大切にしている彼女の背景と、町のこれから商店街のこれからについて真剣に考えている彼女の想いを感じられました。

中学生たちも商店街でのインタビューを通して「商店街に親しみを持った」と話し、だんだんと積極的に取材に取り組むようになり、短い期間の中で成長を感じるまでになりました。今回、自分の中の「伝える」や「表現する」という手法を一つ手に入れるために映像を学びに参加しました。ほかの学生スタッフとの交流や講師のカメラマンの方達に良い影響を受け、とても学ぶことの多かった3日間となりました。今は自分の出来ることを確立し、また山形に帰った時に関わった人たちに返すことが出来るよう、頑張っていきたいなと思います。今回、関わった多くの方々に感謝しております。

学生スタッフ感想

飯塚 朋美（福島大学）

ひろの映像教育プロジェクトに今回初めて関わらせていただきましたが、こんなにゾワゾワするとは思っていませんでした。まず、子どもたちの変化。やらされてる感でいっぱいだった子がどんどん前のめりになっていくし、取材担当を嫌がってた子が後半は自分から「わたしがやる！」なんて言い出し、目を合わせたことのなかった子がふと名前を呼んでくれたり、スキなものについて話してくれたり。たった3日間でしたが、プロジェクト活動を通した子どもたちの変化にただただ感動してばかりでした。

そして、全体のチーム感。映像のプロとして、よりよいものをつくるため、こだわることをやめない講師さんたち。温かくておいしいごはんをつくって待っていてくれるスタッフさんたち。教室でもまち歩きでも、優しい視線で見守ってくれる先生方や職員さん。生徒との関わり方に悩みながらも、最後まで向き合う学生スタッフ。

そして、広野に対する愛情溢れる住民の方たちと、子どもたちと。みんな一体となっていたのです。スタッフ同士でも班ごとでも、最高のチーム感ができあがっていました。全体について一言でいうと、とっても楽しかったです！！ワクワクがぎゅっと詰まった時間でした。本当にありがとうございました！



プロジェクト総括

一般社団法人リテラシー・ラボ

千葉 偉才也

4年目となった広野中学校でのプロジェクトは、昨年の多様なプレイヤーによる「協働」の上に、新たな挑戦に多く挑めた取組みとなった。他方で、その結果新たな景色が拡がり、次に挑戦すべき課題も多く見え始めた年度ともなった。

今年度は、抽象的な「ふるさと」という言葉に立ち止まり、生徒それぞれの等身大の理解を試みた。この背景には、日本各地で声高に叫ばれる地方創生の大号令のもと多用される「ふるさと」という言葉が、必ずしも若年層にとって親しみのない言葉ではないかという疑問があったからである。さらには、震災と原発事故以降の福島県においては、複雑化した地域コミュニティ故にふるさとという言葉がさらに使われるようになっている実状もあり、「ふるさと創造学」として、この機会に「ふるさとを問う」ことへの挑戦から、学習をスタートさせるに至った。

中学1年生14名の生徒にとってのふるさとは、実に多種多様であり、予想以上に豊かな表現を用いてふるさと論が語られた。哲学的な表現をする生徒、親戚との関係性を述べる生徒、具体的な場所や匂いなどを挙げる生徒、帰還困難の地域での思い出を語る生徒など、地域性もあり様々なふるさと論が出た。また、そうした自身のふるさとへの考え方に加え、家族や親せきなどへの質問を課すと、また違ったふるさと観があることに気づき、何気なく耳にしていた「ふるさと」という言葉に、様々な人の多様な側面があることを身を持って体験したことは、今年度の学習の中でとても重要な部分であったと感じている。これは、生徒だけではなく、教員を含め外部講師、学生スタッフなどすべての人にとって、大切な問いとなり、プロジェクトを通じて皆が悩みながら向き合った課題でもあった。



昨年度までは、地域理解の中で、町内で関心の高いものをテーマとして設定することが多かった中で、今年度の取組みは今後の参考になるものとなった。生徒たちは、ふるさとの意味を知っていることを前提に具体的なテーマから探究をしていたが、そもそも意味から考え、そこから出てきた考えを絞りながら探究していくことの意義を今年度の学習で学んだ。こうした挑戦を可能としたのは、過去3年に渡り広野中学校で取組んできた蓄積以外の何物でもないと感じている。4年目を迎え、初年度のプロジェクトに携わった教員が関わり、外部講師と議論を重ね、授業の中でも柔軟に生徒と対話をし、その先の方向を決めていくことができた。これは学校全体がサポートをしていただき、生徒にとっての学びについて真剣に考え、外部講師との連携を快く受け入れてくれたことが大きく、改めて広野中学校の全教員に心からの感謝を申し上げたい。



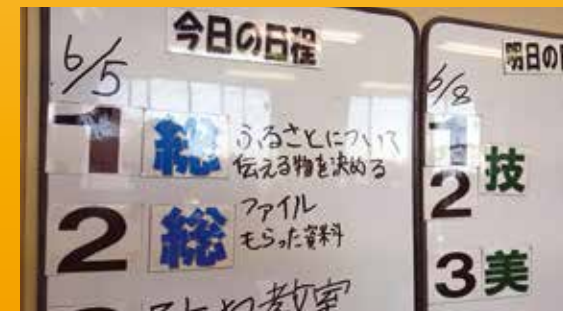
完成作品の試写会には、メディア・リテラシー教育の世界的権威であるデイビッド・バッキンガム英国ラフバラ大学名誉教授も参加いただき、生徒たちの取組みに講評をいただいた。国境を越えた異なる文化背景の人にとってもふるさととは尊いものであることを、生徒たちは感じる機会になった。貴重な機会を提供いただいた、法政大学坂本旬教授にも御礼申し上げたい。以下にバッキンガム教授が試写会後に述べていた感想を紹介する。

数年前、ヨーロッパの異なる国の移民の子どもたちと映画づくりをしました。それぞれの経験を映画にしました。アフリカやアフガニスタンなど。ドイツやイタリアに逃げてきた子どもたちです。ロンドンには、クルド人の子どもたちがいる、ドイツにも同じようなにいます。その子たちが互いの経験を交換しあうのは大変興味深かった。今回、広野でやっていることはそれを思い出させてくれた。映画はそういう意味で、経験を共有できる道具として素晴らしいものであると改めて思えた。

広野中学での取組みは、バッキンガム教授の指す「経験を共有する」ためのきっかけづくりとしての学びであり、相互理解を促し、多様性を育むことを目指していると改めて感じた。ふるさととは固定化された定義よりも、それぞれが感じ、考えるものであっていい、それが多様性でもあり、それぞれの経験を尊重することでもあるのだと教わった年度であったと感じている。

今年度の取組みもまた大きな学びばかりであったが、4年目を迎え次に挑戦すべく課題も多く見え始めた。探究学習を複数年度のサイクルとしてまわしながら、中学校3年間かけて到達すべく取組みには、現時点ではなっていない。中学校1年生で体験した学びを、経験として次学年につなげていくことの重要性は増していると感じている。ふるさとについて主体的に悩み抜いた生徒たちが、次はどのような挑戦をしていくのか、そこも一緒になって考え、設計していく段階が4年目を迎えて来ていることを感じている。これからの広野中学の取組みが楽しみだ。アクティブラーニングの一環として、新しい挑戦をしていく広野中学校にさらに期待をしていきたい。

最後に、今年度も学校内外、地域内外で多くの方々のご協力をいただいたことに、心から御礼を申し上げたい。



【参考】各地での発表（2018年・2019年）

2018年

- 10月 9日 完成作品試写会 & 振り返り対話会
- 10月 11～14日 広野町第5回国際フォーラム
- 10月 27日 広蛸祭（広野中学校文化祭）



- 11月 28日 富岡町3・11を語る会
- 12月 8日 第5回ふるさと創造学サミット



2019年

- 1月 19日 第3回日本こども映画コンクール（入賞）



- 1月 29日 早稲田大学政治学研究科講義
- 2月 14日 広野・榴葉・双葉地区学校事務の共同・連携実施に係る実践研究推進協議会
- 2月 21日 豊島区映像教育プロジェクト上映会
- 2月 27日 広野町社会福祉協議会上映会



- 3月 16日 早稲田大学公共経営稲門会
- 3月 30日 ふくしまメディア教育研究会



平成30年度 広野町 いいな広野 わが町発見
シネリテラシー
ふるさと創造・映像教育プロジェクト 報告書
発行：ひろの映像教育委員会
編集協力：一般社団法人 リテラシー・ラボ
デザイン：千葉 くらら

